

平和への第一歩

師勝中学校三年 後藤 優介

今から七十三年前のあの日、広島で信じられない光景がくり広げられました。大切な家族や住む所を核兵器一つで失ってしまう。そんなこと、あなたには想像できませんか。

平和の使者として八月の五日と六日に僕は広島に行きました。そこは市電が走り、たくさんの人々が観光や生活をしているきれいな町でした。町の様子を見ると、七十三年前に原爆によって本当に何もかも無くなってしまったのかと目を疑うほどでした。

でも、一九四五年八月六日の八時十五分に落とされた原爆によって一瞬にしてあのきれいな町が火の海と化しました。腹がふくらんで死んだ馬。ゴミのように捨てられた大量の死体。全身の皮膚がたれ下がり、「水をくれ。」と水を求めて歩く人。いつものように朝起き、朝食を食べ、登校したりした生活ががらりと変わってしまったのです。しかし、被害はそれで終わらず、広島に原爆が落ちたと聞いて、疎開から戻ってきた子供などが放射線によってケロイドや白血病になって、合計十四万人の人が亡くなりました。十四万人。この数字を聞いて僕は驚きが隠せませんでした。

また、当時の被爆者の朗読から原爆孤児になってしまい、辛い思いをした人がたくさんいたという話を聞きました。彼らは数少ない食料を取り合い、争いに負けた者に待っているものは餓死。たとえ親戚に引きとられたとしても店に働かされたり、厄介者扱いをされる。しまいには広島の人には原爆による障害をもった可能性があるといった理由から他の地域の人から差別をされてきたそうです。自分たちが原爆を落としたわけではないのに、今の僕らには考えられない苦しい生活を広島の人たちは過ごしました。

戦争によって多くの人が大切なものを失った広島の人々。彼らからすべてを奪ってしまった核兵器がこの世界にはまだ存在しています。これらがまた一つでも使われればまた多くのものを失ってしまうでしょう。僕らには戦争によって亡くなってしまった人々をもとに戻すことはできないけど、彼らがそろって言った「もう二度と同じ過ちを繰り返してほしくない」という意思をこれからへと受けついでいくことはできるはずですよ。そのためにも、僕たちが唯一の被爆国の国民として核兵器廃絶を世界に呼びかけていくことが大切だと思います。僕らが平和でいられるのは、そういった辛い歴史をたどってきたからで、決して当たり前ではない、それを一人一人が意識していけば戦争はきつと無くなるはずですよ。そして僕は亡くなった人たちに「平和な世界になりましたよ。」と、伝えたいと思います。

人類の前進

西春中学校三年 森口 生海

一九四五年（昭和二十年）八月六日、午前八時十五分。広島に一発の原子爆弾が投下。無差別に多くの尊い命を奪い、廃墟となった広島。多くの人の未来を奪ったのです。

爆心地である病院の建物も完全に吹き飛ばされ、入院患者全員と約八十名の職員が即死したそうです。一発の兵器により、二十万人をこえる人々の命が一瞬にして奪われたのです。三千度から四千度の熱線によって溶けた皮膚を垂らし、血だらけになって「水がほしい、水がほしい」と訴えながら歩く人々の声。血に染められた赤い足跡。放射線によって男女の区別がつかないほど、黒く焼け焦げた人々。がれきの中には、生きたまま埋まっている人々。半径約二キロメートルに及ぶ市街地が、わずか数秒で何も無い世界、地獄絵と化しました。いつものように朝を迎えた広島の人たちは、こんな恐怖がおこるなんて想像していなかったことでしょう。七十三年前に原子爆弾が投下された広島。戦争はこんなにも悲しく残酷なものだと知らされました。

僕は今年、広島市の平和記念式典へ平和の使者として参加しました。「平和を願っている。」被爆者の方が何度も語りかけていました。この言葉には、多くの人への思いやりの気持ち、命を大切にするという気持ちが込められていました。僕達ができる身近なことから新たな一步を踏み出し、思いをつないでいくことが大切だと思います。

一瞬にして被爆者となり、家族を奪われてしまった方々は二度と核兵器による被害を出してはならない、核兵器の廃絶と世界恒久平和を一番に願っています。

ところが、未だ世界には一万四千発を超える核兵器が存在します。人間は争いに勝つために自分たちの住む地球を破壊するほどの力を持つ「核」を開発しました。しかし、核兵器廃絶こそが、世界恒久平和へとつながり、被爆者の方々を含む世界中の人々の願いが叶えられると思います。

広島市の松井市長は平和宣言で、ICANがノーベル平和賞を受賞し、「被爆者の思いが世界に広まりつつある。」と話されました。また、世界の指導者に、核兵器のない世界を作るために、国際社会の対話と協調を求めました。

世界の人々が、核兵器に対するさまざまな考えをもち始めた現在、僕たちは、何をしたらよいのでしょうか。何を伝えるべきでしょうか。人類と核兵器は共存できません。「自分たちと同じ苦しみや悲しみを経験させてはならない。」被爆者の方々の強い思いを受け止め、継承していく意思と営みが、僕たちの使命です。

原爆ドームはその悲惨な姿をもって世界に平和へのメッセージを今も発信し続けています。未来を生きる僕たちは平和のため「一歩また一歩。」と努力し、

前進していかなければなりません。
「安らかに眠って下さい過ちは繰返しませぬから」

核無き世界を目指して

白木中学校三年 細野 滉平

広島。そこは、中国・四国地方最大の都市で、その中心部は毎日、多くの人が行き交っている。しかし、今では想像できないが、七十三年前、そこは火の海、そして、死体の海になっていた。あの忌々しい、悪魔のような兵器によって。

一九四五年八月六日の朝、広島は晴れていた。空襲警報も出しておらず、人々は、家事を始めたり、働きに出たりと、普段と変わらない、穏やかな生活を送っていた。しかし、八時十五分、あの悪魔は、広島一帯を襲い、一瞬で全てを壊滅させた。その悪魔の正体、それは、「原子爆弾」だ。原爆は、爆心地周辺を、三千度から四千度という、鉄をも溶かしてしまうほどの熱線と、音よりも速い、秒速四四〇メートルの爆風、そして大量の放射線で襲ったといわれている。

僕は先日、平和の使者として原爆ドームや平和記念資料館などを見学した。そこでは、原子爆弾による被害の様子を、展示されている当時の写真や遺品などを通して知ることができた。熱線を浴びて全身に大火傷を負い、年齢はおろか、性別さえも分からなくなっている人の写真や、石段に残った人影の写真、大量に放射線を浴びて、「死の斑点」が出た人の写真、八時十五分で針が止まっている時計と、展示されているもの一つ一つが原爆の恐ろしさを物語っていた。さらに僕は、被爆体験伝承者の方による講話を聞き、原爆によって両親を亡くした子供、いわゆる「原爆孤児」についても知ることができた。伝承者の方は、原爆孤児たちは、いじめに遭い、差別を受け、飢餓に苦しんだと話していた。何の罪もない子供が、原爆によって苦しめられていたと思うと、僕は胸が締めつけられるような気持ちになった。

現在、世界には、一万四千発以上の核兵器が存在している。しかし、核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）のノーベル平和賞受賞などに見られるように、「核兵器を全世界から無くさなければならぬ」という思いは世界中で強まっている。だが、北朝鮮によるミサイル開発や核実験に見られるように、完全な核兵器廃絶にはまだまだ課題が残されているのも事実である。

現在の原爆被爆者の人数は約十五万人、平均年齢は八十二・〇六歳と、被爆者の減少、高齢化が進んでいる。これと同時に、原爆惨禍の記憶の風化も進んでいる。僕たちは、二度とあのような過ちを繰り返さないためにも、原爆惨禍の記憶を次の世代、また次の世代と伝え継ぎ、風化させないようにすることが大切である。

今回、僕は平和の使者として、広島を訪れた。そして、原爆の悲惨さを改め

て学ぶことができた。これから僕は、核無き世界の実現のために、自分に何が
できるのか、そして、学んだことをどう活かせば良いのか、よく考えていき
たい。

平和への祈り

訓原中学校三年 緒方 麻明知

「これは ぼくたちの祈りです

これは 私たちの祈りです

世界に平和を きずくための」

この言葉は、「原爆の子の像」の石碑に刻まれていた言葉です。

七十三年前、広島には真夏の太陽が照りつけ、いつも通りの一日が始まるようになっていました。そんな日常は、たった一発の原子爆弾によって破壊されてしまったのです。八月六日、八時十五分。広島は一瞬にして地獄と化しました。目もくらむ閃光、強烈な放射線と熱線、猛烈な爆風。立ち上ったきこの雲の下で、多くの大切な命が奪われ、辺り一面が火の海となり、街は崩壊しました。

僕は今回平和の使者として広島に行かせていただき、原爆について学びました。平和記念資料館に展示されていた、ボロボロになった三輪車、高温で溶けたガラス瓶、八時十五分で止まった時計……。それらの一つ一つが原爆の悲惨さを物語っていて、僕は胸が苦しくなりました。

僕は今まで原爆のことを深く知りませんでした。正直、知りたくもありませんでした。「原爆の話は恐ろしくて嫌だ。僕にはあまり関係のない話だ」と心のどこかで思っていました。みなさんも、そう思っているのではないのでしょうか。しかし、僕は今回広島に行って原爆について学んで、今までただ「怖い」というて知ろうとしなかった自分を恥ずかしく思いました。実際に原爆による被害を受けた人たちは、原爆の恐ろしさを僕たちに伝え、二度と過ちを繰り返させまいと必死で活動が続いています。その人たちの努力を無駄にしようようなことは、絶対にあってはならないことです。だからこそ、僕たちがその人たちの思いを受け取り、原爆と向き合っていかなければならないのだと思います。

今、核兵器の一発の威力は広島・長崎に落とされた原子爆弾の何千倍にもなっています。地球上の核兵器を全て使用すると、人類が絶滅してしまうほどの危険な状態が続いています。世界平和の実現のためには、核兵器の廃絶は絶対条件です。核を持つのではなく、核を手放す勇気をもつこと。それが平和への第一歩なのではないかと僕は思います。いつの日か、世界から核兵器がなくなり、世界が一つになって平和になることを、心から祈ります。

今回平和の使者として貴重な体験をさせていただき、感謝しています。今回学んだことをたくさんの人に伝えていき、少しでも平和の実現への力になるように思います。

伝え続けること

熊野中学校三年 名原 良輔

一九四五（昭和二十）年八月六日、午前八時十五分、広島上空に小さな太陽が現れ、その周りは瞬く間に焼け野原となった。黒くなり、道端に転がる死体が山のように重なっていた。そして、広島から笑顔が消えた。

原爆が落とされた爆心地の少し離れたところに平和記念公園がある。焼け野原となったこの場所は、現在、平和記念資料館や原爆死没者慰霊碑が建てられたり、平和記念式典が開催されたりと、戦争の悲惨さや愚かさを世界に訴える場所になっている。私は、この公園に、広島平和記念式典の平和の使者として訪れた。

式典には、日本人だけでなく、外国の方々も参加していた。その姿を目にし、世界中の人々が、この広島に原爆が落とされたという事実を胸を痛め、この事実を風化させないために、式典に参加してくれているのではと、うれしく思った。しかし、その反面、日本に住む私たちがもっと、この原爆について知らないといけないのではないか、世界で初めて核兵器が使われた国という事実に正面から向き合わなければならぬのではないかとこの考えをもった。また、平和記念資料館を訪れ、当時の写真や資料を見たり、被爆した方の話を聞いたりしたこともあり、さらにその考えが強くなった。

特に、印象に残ったのが、原爆孤児の話である。子供たちは疎開していたので、直接的な被害からは免れたが、爆発に巻き込まれた家族を探そうと広島に戻り、放射線を浴びて被爆してしまう。被爆したことで差別され、不遇な人生を歩むことになる。戦争での被害を受けた人々が、戦争後も放射線の影響により、人生が大きく歪められるという不条理に、怒りすら覚えた。また、孤児収容所に預けられた子どもたちは、僅かしかもらえない食料を奪い合い、その争いに負けた子は餓死していったという話を聞いた。本当に胸が痛くなり、もう話を聞きたくないと耳をふさぎたくなった。しかし、それは、原爆で亡くなった人々から目をそむけることになると思い、最後まで、真剣に話を聞き、この事実を決して忘れまいと心に誓った。

日本に大きな被害をもたらした核兵器は、今でも世界中に存在している。同じ過ちを起こさないために、核兵器が使われた唯一の国としてできることは、原爆がもたらした悲惨な事実を、世界中に発信していくことではないだろうか。風化させることなく、後世の人々に伝えていくことなのではないだろうか。そして、私たちのような若い世代が、原爆について正面から向き合い、自分なりの考えをもつことが必要なのではないだろうか。

私は、平和の使者として広島を訪れ、原爆について深く考えることができた。
その考えを一人でも多くの人に広げていきたい。それが、平和な世界をつくる
一歩になるのだから。

忘れない

天神中学校三年 大藤 慎之介

昭和二十年（一九四五年）八月六日午前八時十五分。広島上空に一発の原子爆弾が投下されました。広島は、一瞬にしてすさまじい光と共に焼け野原となりました。広島は地獄と化したのです。

今回、僕は北名古屋市平和の使者として広島を訪れました。新幹線から見る広島眺めは、実に目を疑いました。原爆が落ちたとは思えない程きれいでした。

僕たちは、平和記念資料館で原爆に関する記事や写真などを目にしました。熱く変形したビン、熱線によって肌がとけた女性の写真、八時十五分を指したまま止まっている懐中時計などが展示されており、僕はその一つ一つがどれも、原爆の悲惨さの象徴であるのだと思いました。

原爆が爆発した直後の広島は、なんと三千度から四千度にもなったそうです。それは、太陽の温度とほぼ一緒だそうです、まさに広島に小さな太陽が突然現れたと言っても過言ではないのです。

僕たちが歩いているときに、ある石碑を目にしました。そこには、「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」と刻んでありました。この言葉を見た瞬間、自然と心が落ちついたのです。被爆していない僕でも、被爆者の気持ちになっただけで感じる事ができたのです。まさに被爆への鎮魂の言葉です。

僕は、今まで戦争・原爆というものにあまり深く触れたことがなかったので、このような経験をさせてもらって本当に良かったと思います。僕たちが住んでいるこの日本に核兵器がおとされたことを決して忘れてはなりません。僕たちの使命は、核兵器をこの世から廃絶すること。そして、これから世界が平和になるために一人一人が全力を尽くすことだと思います。僕は今回広島に行って学んだこと、得たこと、そして、日本が世界で唯一の被爆国であることを決して忘れません。永遠に。